

第6節 庄・蔵本遺跡1995年東病棟地点出土の東日本系弥生土器

(1) 資料の概要

庄・蔵本遺跡1995年東病棟地点（第2図13）からは、弥生時代前期の開析流路SD61が検出されており、弥生時代前期末・中期初頭を中心とする時期の土器が多量に出土している。この開析流路SD61は弥生時代前期末・中期初頭には、ほぼその役割を終え、埋没してしまうが、化石化した凹地として弥生時代終末期～古墳時代中期ごろまでは利用されていたと考えられる。開析流路の機能停止後と考えられる上層中より弥生時代中期前葉～中葉と考えられる東日本系土器5点3個体が出土している（第41図3～5）。また、同じ時期の土坑SK19からも、類似の土器が出土している（第41図1・2）。

(2) 土器の説明

第41図1～4は壺の胴部ないし頸部片である。櫛またはヘラ状の工具によって重四角文を描き、上下を三角刺突文によって区画している。1～3は風化しており、胎土の特徴をつかみにくいが、4はあきらかに地元産の胎土ではない。

5は、壺の胴部～底部で、頸部～口縁部を欠いている。外面をヘラミガキで仕上げ、胴部上半に無節Rと思われる縄文と櫛描文を交互に施している（5a）。同一個体には櫛描波状文もみられる（5b）。胎土の特徴は地元産の土器と大差ない。

いずれの土器も、どの地域のものかはまだ絞り切れていない。故地に関する考察は今後の課題とした。

(3) 東日本系土器出土の意義

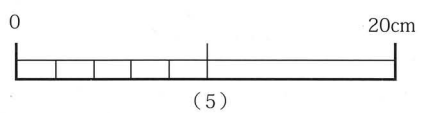
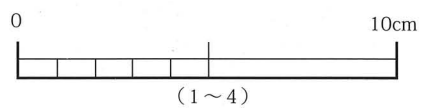
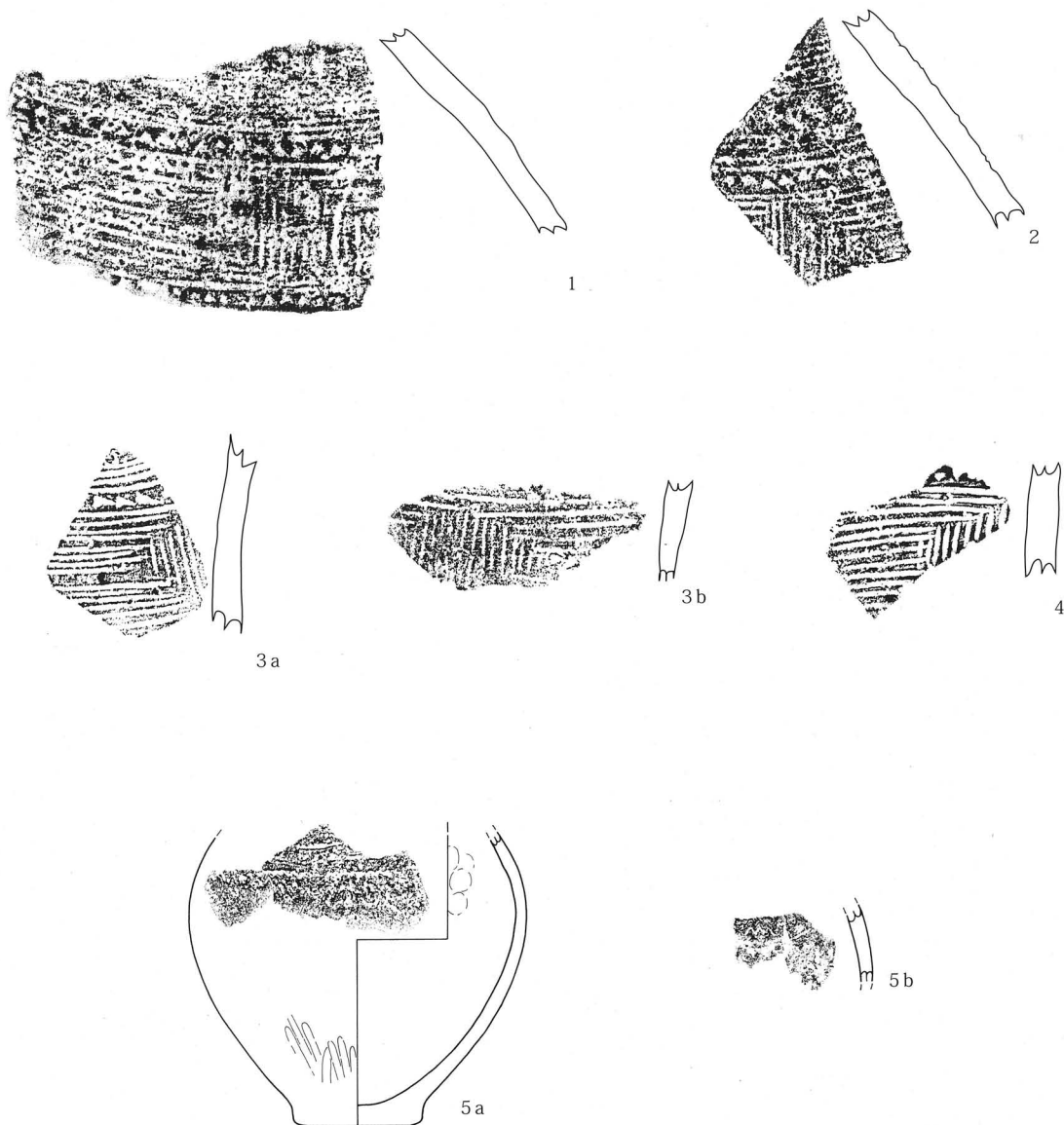
徳島地域では、縄文時代晩期においては東日本系土器の出土がみられる。しかし、弥生時代前期以降は、ほとんど認められないと考えられてきた。その背景には、弥生時代の文物は西方からもたらされるという潜在的な意識があったと考えられる。今回報告した資料は、こうした見方に再考を促すものである。

庄・蔵本遺跡は、弥生時代前期初頭の集落形成以降順調に発展し、弥生時代前期末・中期初頭には相当な規模に拡大する。しかしながら、集落拡大の基盤となっていた灌漑水田稲作経営が、地形環境の変化によって難しくなり、中期初頭を境に集落は解体し、小規模化する。一端解体した集落が再編するのは中期中葉である。庄・蔵本遺跡は墓域となるが、隣接する南庄遺跡や名東遺跡で集落が形成される。その結果、中期後葉には弥生時代前期末・中期初頭を上回る規模での集落が展開することとなる。

弥生時代前期初頭を起源とする集落は、青藍会館地点（徳島大学埋蔵文化財調査室編1998）での、配石墓・土坑墓からなる列状の墓域や碧玉製管玉の副葬などからみても、大陸や九州北部など西方の影響を受けて成立したことがあきらかである。しかしながら、これを原点とする集落は弥生時代中期初頭には一旦解体する点に注意しておく必要がある。弥生時代中期中葉以降に展開する集落の特徴は、墓域に方形周溝墓を採用するところにある。この平面は四隅が切れる形態をとっている。弥生時代中期前葉から中葉にいち早く四隅の切れる形態の方形周溝墓を発達させるのは、伊勢湾沿岸地方である。すなわち、庄・蔵本遺跡を含む鮎喰川東岸における集落再編には、この地域を通しての東方とのかかわりも考えられるのである。今後は、この点をも十分に視野においた上で、調査研究を進める必要があるといえよう。

文献

徳島大学埋蔵文化財調査室1998『庄・蔵本遺跡1』徳島大学埋蔵文化財調査報告書1



第41図 東日本系土器